

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2008. 3. 1

主な内容		頁
『防大生へ』（寄稿）……………	幹 事 火箱 芳文 ……	(355)
教官著書の紹介 ……	国際関係学科 武田 康裕 ……	(357)
職員推薦図書の紹介 ……	図書館事務室 飯島 幸夫 ……	(358)
図書展示コーナーの紹介 ……	図書館事務室 ……	(360)

## 『防大生へ』

幹 事 火箱 芳文

千利休は「規矩作法を守り尽くして破るとも離れるとても基を忘るな」という言葉を遺している。所謂「守」「破」「離」のことである。名人・達人の域に達するには基本の修得が大事でこの徹底的な修得によってはじめて人は名人・達人の域に到達できる。私は大学時代柔道を学んだ経験があるが、全日本級の選手ほど基本がしっかりしていることを常に感じていた。将来この国を背負うべく陸・海・空幹部自衛官となる防大生にとって必要な基本基礎とは何であろうか。哲学者森信三は「大学の任務は①将来それによって世に役立つところの専門的知識の概要を身につける。②人間としてこの人生をいかに生きべきかという根本問題についてその端緒をつかむ少なくともその方向を決定すること」「専門的知識

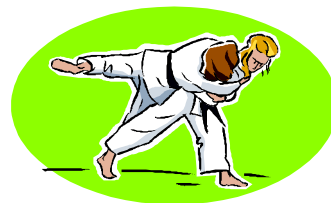


大要を身につけることはいわば円周にあたり、これに対し人生をいかに生くべきかの端緒をつかむ問題は円心に当たる。」と述べている。

防大生は毎日本校での学業、訓練、学生舎生活、校友会活動等に励んでいるが、これらの全てが将来の陸・海・空の幹部自衛官としての必要な専門的知識の修得と人生をいかに生くべきかの端緒をつかみ人間的態度を確立する為にある。特に防大においては円心に当たる人間的態度を確立すること即ち国を背負うということを決意すること、国のために全力をあげて生きるということを自覚する端緒をつかむことが先ず重要である。その上で円周に当たる専門的知識の修得に全力をあげてほしい。同氏はまたこうも述べている。「人間が学校で教わることはちょうど地下工事に当たります。その上に各人が独特の建物を建てねばなりません。その建物のうち柱は教えであって壁土は経験です。」と。この地下工事に当たる部分が防大時代の教育であり、しっかりとした基礎工事ができていなければ後でいくら立派な柱を立てようと壁土を塗ろうと頑丈な立派な家にはならない。人生においては、この基本を学ぶ最も大事な時期にただ何となく与えられたものを消化するだけの受け身で過ごしている者もいるのではないだろうか。

「学ぶ」という言葉は「まねぶ」が変化し「まねぶ」は「まねる」を語源としていると聞く。真の学問は何によるべきかはよき師友、活きた人物の感化に勝るものはなく、次に陶冶さ

れた人格から出る知恵の結果たる諸々の著書と言われる。「人は人によって人となる」もので防大の優れた業績を残された学群の諸先生、陸・海・空の自衛官、職員、尊敬できる上級生や同期により多く接触して優れた生き方・生き様を先ず真似ることから始めてみるとよい。この際、上下の関係からは絶対的なものを、同期・同僚からは人生の相対的な方向を学んでほしい。楨初代校長が「規律及び服従の真髓の体験」を望んだ学生舎生活と「自主的に品性の陶冶と知力体力の増進を図りつつ上下の区別なく友情を培う」ことを期待される校友会活動はこの絶好の機会を与えてくれる。この様に防大の生活は単に専門的な知識を学ぶだけでなく人生をいかに生くべきかの端緒をつかむためこれほど恵まれた環境はない。人間は自らに気づき自ら克服した事柄のみが自己を形づくる支柱となるものである。単に受身的に聞いたことは何の価値もないものであり身に付かない。防大時代の青春の時期は人生の開花期であるが、決して結実期ではない。人生の晩年に見事にたわわに実る果樹となるため、今この時に目覚めて自分の一生の見通しをつけ学業、訓練、学生舎生活、校友会活動の日々の努力を怠らぬ様先輩として切に願う。



## ~~~~~ 教官著書の紹介 ~~~~~

## 『安全保障のポイントがよくわかる本』



編 著  
防衛大学校安全保障学研究会

編集及び紹介  
国際関係学科教授 武田 康裕

亜紀書房（2007年）

編者が言うのも何ですが、本書の面白さは謎解きにあります。無論、推理小説のような面白さを期待されては困りますが、一見自明に思える事柄が実はそうではないと分かった時の刺激を味わいたい方は、是非一読して欲しい一品です。

たとえば、あなたは次の質問にどう答えますか。①「国家の安全を守ることは、国民一人一人の安全を守ることと同じである。」②「侵略戦争は自衛戦争と全く別の戦争である。」③「自爆テロのような非合理的な行為を抑止できない以上、それを未然に防ぐことは不可能である。」④「他国に対する軍事的優位こそが自国の安全の確保につながる。」⑤「共通の脅威が消失すれば、同盟は解体され

る運命にある。」これらの質問に全く答えられなかった人、あるいは迷うことなくYesと答えた人、そのどちらもが本書の期待する読者層です。

つまり、初めて安全保障の書物に触れる人には、定説を習得するよりも、白紙の状態で一から安全保障という問題を考えてもらい、また、安全保障を既に専門的に学んでいる人にも読み応えのある内容を追及したつもりです。そこで、従来の教科書や学術論文集とは異なり、敢えて論争点を提示し、それに答えるというアプローチをとりました。

ただし、本書の構成は、いたってオーソドックスです。「何を、何から、どのように守るのか」という安全保障の基本的な命題に応じ

て、5つの章が配置されています。

第1章「何を守るのか」(久保田徳仁)では、国家・国際社会・人間の安全保障、経済の安全保障、環境の安全保障、資源・食糧の安全保障、政治・文化の安全保障などを取り上げ、安全保障とは誰のどのような価値を保護することかを論じます。続く「安全を脅かすものは何か」に関しては、第2章(西原正)で伝統的脅威(侵略と現状不満国、地域安全保障環境、国際安全保障環境、国内紛争と国外勢力の介入)を、第3章(宮坂直史)で非伝統的脅威(国際テロリズム、大量破壊兵器の拡散、破綻国家、移民、海賊・麻薬)を分析します。第4章「何で安全を担保するのか」(岩田修一郎)では、脅威に対処する軍事的及び非軍事的手

段(軍事力、外交、経済的手段、情報と技術、ソフトパワー)の効果を考察します。第5章「どのように安全を担保するのか」(武田康裕)では、脅威への対抗と脅威との協調という観点から様々な安全保障協力(勢力均衡と同盟、国連と集団安全保障、協調的安保、国際法と安全保障レジーム、安全保障共同体)の有効性を検討します。尚、各章の最後で、「日本の視点」として、政府が取り組んでいる政策やアプローチを紹介しています。

『安全保障のポイントがよくわかる本』。本のタイトルに「本」と銘打った奇妙な書物ですが、読者の皆様に「確かにそうだった」と言われることを執筆者一同期待しています。

## ~~~~~ 職員推薦図書の紹介 ~~~~~

### 『「命令違反」が組織を伸ばす』



著 者  
慶応義塾大学商学部・  
大学院商学研究科教授  
菊澤 研宗

紹 介  
図書館事務室 防衛技官  
飯島 幸夫  
光文社新書 (2007年)

#### 1. はじめに

最初にこの本の題名を読んで何を想像されるだろうか。私は防衛省の一職員として組織

に属している観点から興味をそそられた。現代社会において、様々な事象が起こっている中でも近年、食品偽装などにより組織を守り、リスクマネージメントを疎かにし社会から非難を浴びる場面を報道で映し出されるのに暇がない時世である。何故この様なことが起こるのだろうか、考えていたところにこの本の題名が目にとまり、防衛大学校学生諸君に紹介するものである。

## 2. 図書紹介

本書で著者は、人間の「無知」、「不条理」に起因する失敗を「条理な失敗」とし、人間の関わる重大な失敗の多くは、予期できたにもかかわらず突き進んでしまう「不条理の失敗」として著している。前にも述べたが組織の一連の不祥事の多くは、この「不条理」に起因している。いかに組織の「不条理」を回避できるのか、答として「命令違反」を前提に考察していることである。この本では「不条理」の極端な事例として太平洋戦争時の日本軍の行動を多角的な視野から分析し、「命令違反」が組織を存続させるだけでなく、進化させることを紐解いている。内容構成としては、

- ・人間は限定合理的な存在である
- ・第1部 二つの組織の不条理（“タイプ1”の不条理—インパール作戦での牟田口廉也；“タイプ2”の組織の不条理—ガダルカナル戦での白兵突撃戦術；命令違反のすすめ）

- ・第2部 “タイプ1”の不条理を打破する命令違反（ペリリュー島での中川州男の悪い命令違反；ノモンハン事件での辻政信の悪い命令違反；良い命令違反と悪い命令違反1）

- ・第3部 “タイプ2”の不条理を打破する命令違反（ミッドウェー海戦での山口多聞の悪い命令違反；レイテ海戦での栗田健男の悪い命令違反；良い命令違反と悪い命令違反2）

- ・命令違反のマネージメント

の以上である。

## 3. おわりに

この本を読み終えて、今まで学んだ歴史からの教訓にとどまらず組織に起因する「不条理」をリスクマネージメントの観点から、経済学的視野を取り入れ、著者が太平洋戦争時の日本軍の行動を多角的視野で分析していることである。如何に情勢を捉え、分析し、行動したかのメカニズムを端的に著し、リスクを回避するかと言う点で一つの回答を与えて貰えたと感じている。また、“人間は限定合理的な存在である”の章ではセーフティーネット構築のヒントがあり、“命令違反のマネージメント”の章ではリスクマネージメントの考え方を著者が示している。将来、各自衛隊で各級指揮官として行動するときの資質を養うための一つの参考として読んで頂ける事を希望するものである。

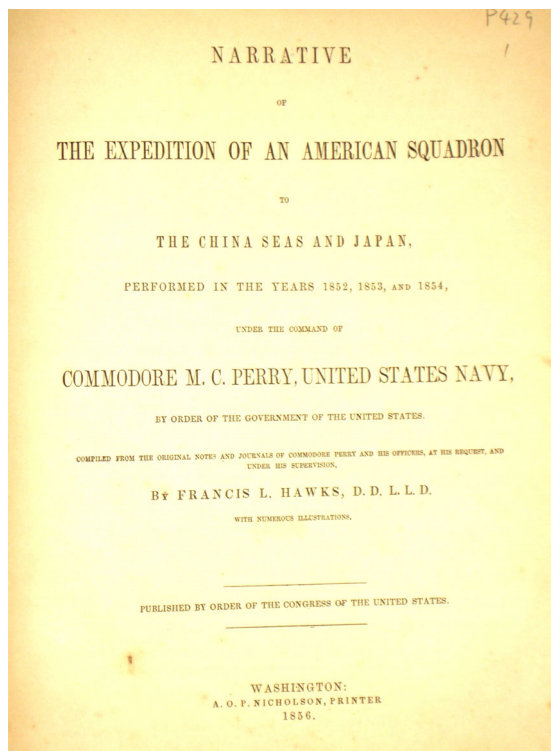


~~~~~ 図書展示コーナーの紹介 ~~~~~

日米修好通商条約150周年記念  
『ペリー来航とその周辺』展

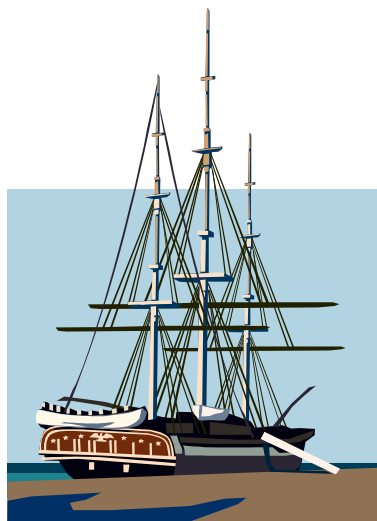
図書館事務室

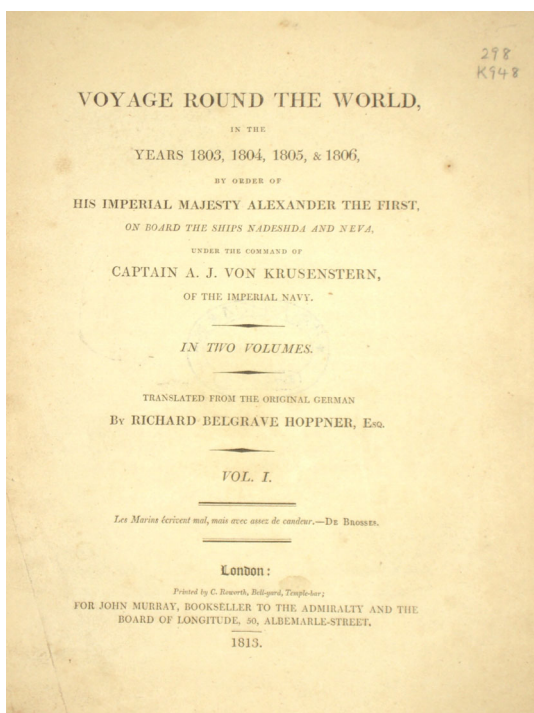
2月1日から図書館の展示コーナーにおいて日米修好通商条約150周年を記念してテーマ「ペリー来航とその周辺」展を行っています。本校図書館で所蔵している図書を展示してその時代の歴史を探訪していただくための展示で、来館の際は見学して頂けるようご紹介致します。展示の蔵書については次の蔵書であります。



ペリー提督著「日本遠征記」全3巻  
(Narrative of the expedition of an  
American squadron to the China Seas and  
Japan)1856年出版 (米ワシントン)

本書はペリー提督が帰国後、海軍省を通じて議会上院に提出した報告書である。1855年に帰国したペリー提督は、ニューヨークの牧師で歴史家でもあるフランシス・L・ホークスにすべての資料を渡して執筆を依頼した。8ヵ月後に完成したものが本書第1巻である。第2巻は航海で知りえた各地の植物・魚類等の記録で、ペリー提督自身が採取し解説したものもある。提督は植物収集家としてもかなりの蓄積を持っていた。また第3巻は天文現象を観測した記録である。これらは58歳であったペリー提督が人生最後の仕事を広く世界に伝えたいと考えたもので、堅苦しい議会報告でなく、広く読まれる作品になっている（「ペリー艦隊遠征記」第1巻日本語版序より）。





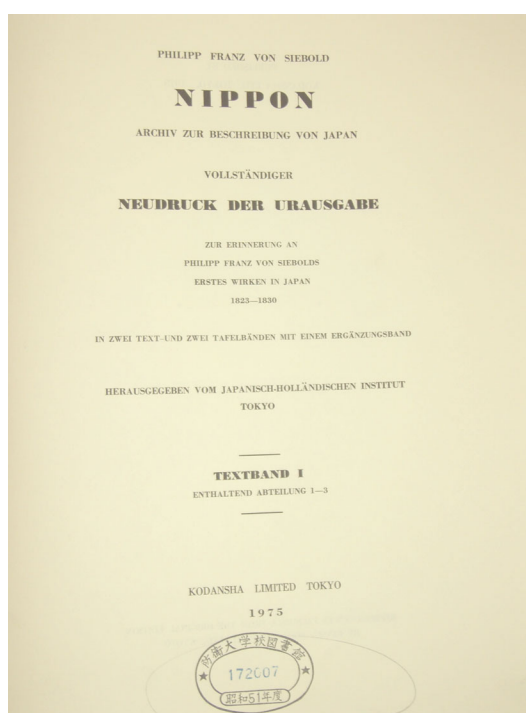
クルーゼンシュテルン著「世界周航記」

(Voyage Round the World)

1813年ロンドンで出版

(英語版 (原書はドイツ語))

クルーゼンシュテルンは帝政ロシア海軍の軍人で、1803年から1806年にかけて、カムチャッカ半島のペトロパブロフスクから長崎にいたる日本周辺の航路を念入りに調査した。その成果は本図書とは別の本として公刊され、これはペリー提督の日本遠征にとってこの上ない刺激となり、参考となったと言われている(曾村保信著「ペリーは、なぜ日本に来たか」p31)。その内容は本書にも多く含まれていると思われる。特に目次末尾の日本周辺海域図から、当時のヨーロッパに日本周辺がどのように認識されていたかがうかがえる。



シーボルト著「日本」

(Nippon : Archiv zur Beschreibung von Japan)

復刻版 1975年(原書 1832年)出版 (6分冊)

ペリー提督が日本遠征に際して集めた日本関係の資料として、筆頭に挙げられるもの(曾村保信著「ペリーは、なぜ日本に来たか」p262、宮永孝著「ペリー提督—日本遠征とその生涯」p90)。「日本遠征記」第一巻でも、奄美諸島から浦賀に至る航海の記述でこの著書の内容に言及している。

ドイツ人医師シーボルトは日本滞在中に膨大な資料を収集し、帰国後その成果をまとめ、1832年から20年間にわたり出版した。本書はその復刻版であるが、できるだけ原書に忠実に再現されたものである。

今後も本校図書館において、蔵書展示等を実施していく予定ですのでより多く利用者の方々に見学していただけるよう図書館員一同お待ちしております。

---

NADAL Bulletin Vol. 22, No. 2

防衛大学校図書館だより 2008. 3

---

発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校図書館 Tel. 046-841-3810

図書館長 村 井 友 秀

---

編集委員

阿 部 洋 (機能材料工学科)

久保田 徳 仁 (国際関係学科)

田 中 誠 (国防論教育室)

---

編集庶務

北 村 孝 一 (図書館事務室)

飯 島 幸 夫 (図書館事務室)

---

印刷所

防衛大学校 図書館事務室

「図書館だより」事務局 出版

---